みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

選挙と発掘とUFO：巻頭エッセイ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4878

巻頭エッセイ

選挙と発掘とUFO

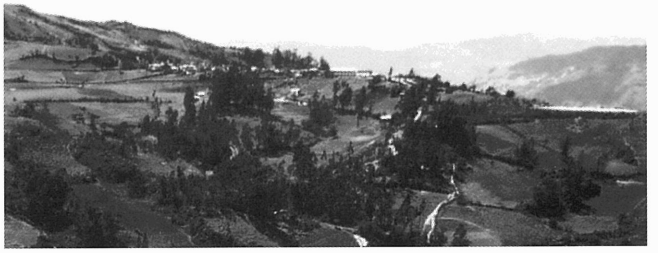
関　雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

「ケロコト地区の村長候補……は、まじめな人物、仕事ができる人物。10月3日には皆で投票しましょう。」今夏の発掘は、まさに地方選挙のシーズンと重なりました。4年前は、それほど激しくはなかったように記憶していますが、首都のリマでも、わがパコパンパ村が所属するケロコト地区でも、じつに激しく、醜いまでの票の獲得合戦が繰り広げられていました。ケロコト地区は、大都市から7時間も離れた山中の村ですが、それでも、候補者は数台のピックアップ型軽トラック（ほとんどがトヨタ社のハイラックス）を持ち、誰彼の区別もなく、移動や運搬手段を提供し、がむしゃらな票集めを展開していました。そのためか、カハマルカ市の車全体が不足し、調査団の車の手配が難しくなるぐらいでした。

従来の選挙でしたら、住居の白壁に候補者の名前と、所属政党のロゴがペンキで描かれ、そのロゴに×印が付けられるというのが主な宣伝方法でした。ペルーの選挙では、投票用紙に候補者の名前を記すのではなく、所属政党のロゴに×印をつける方法が採用されてきたからです。ところが、投票方法に変更はないものの、今年の選挙戦では、一軒の家全体を覆い隠してしまうほど大型の選挙ポスターが掲げられ（ヒガントグラマというデジタル印刷です）、村の広場に設けられた桟敷では選挙演説が行われました。そればかりか、演説の終了後は、食事とビールの飲み放題。楽団が奏でる音楽は、大型スピーカーを通して、何ブロックも先の我が家にも響き、その演奏をバックに、広場では朝の3時近くまで村人たちのバイレ（踊り）が続きます。冒頭でとりあげた言葉は、日本のような選挙キャンペーンで街頭演説の車から発するアナウンス嬢の言葉ではありません。じつは、楽団が演奏するチチャというペルーで生まれたポピュラー・ミュージックの歌詞なのです。選挙用に作られた楽曲です。これには笑えました。

選挙は発掘にも影響を及ぼしました。6年前から片腕として働いてきた村人を含め、何人かが別の地区の村長候補の甘い口車に乗せられ、選挙登録住所をパコパンパ村から違法に移してしまう事件があったのです。トタン屋根と焼きレンガの賄賂を目の前にして、誘惑に勝てなかったのでしょう。貧困の悲しさでもあります。村人としての誇りを捨てたとして隣人、同僚の反感を買い、最終的には、該当者については、発掘作業員としての権利を放棄してもらわざるをえませんでした。これは確かに違法行為ですが、先にあげた飲み食いなどは買収にはあたらないようです。選挙当日、各政党は、投票場までの移動手段としてバスを用意し、宿泊や食事の世話までみるケースすらあります。

そんな選挙戦が展開される今年の8月中旬、パコパンパ遺跡で発掘していると、作業員である村人が、やたら空を見上げながらつぶやいているのに気づきました。雲など愛でる習慣は聞いたことがなく、いったい何をしているのかと尋ねてみると、



パコパンパ村の上空を飛ぶUFO
http://www.rpp.com.pe/2010-07-21-fotografian-ovni-en-cielo-de-pacopampa-departamento-de-cajamarca-noticia_281650.html

「OVNIがでたらしい」と教えてくれました。OVNIとはスペイン語で未確認飛行物体を指します。いわゆるUFOです。ちょうど、ある発掘区で、川原石を円状に何列も並べた、奇妙な構造物が出土した時期にも重なり、UFOの着陸施設かと団員と冗談を交わしていた時期でした。またその報道前には、ペルー人の団員の二人が、夜間、静止する飛行物体を目撃し、非科学的と揶揄されると思ったのか、恥ずかしそうに私に伝えた件もありました。ともかく、しばらく私も空を眺めていましたが、何も見えません。村人の単なる噂話かと思い、遺跡から麓の村に下りてみると、中学校教師までがラジオのニュースで聞いたといいます。これは大変と、インターネットで検索してみると、確かに報道されていました。しかも写真つきです。パコパンパ村の上空に、確かに三角形の物体が飛行しているように見えます。

解説を読むと、エルメル・ブルガ・ムンダカという農業エンジニア（ペルーでは科学分野で大学卒業後、ライセンス試験に合格すると皆インヘニエロ（エンジニア）という資格を獲得できます）が、昨年、写真を撮影したとあります。鉱山開発で、変貌を遂げつつあるパコパンパ周辺地域の自然を記録しておこうと撮った一枚に写っていたようです。すぐに発表しなかったのは、写真に問題がないかどうか各種専門家に検討を依頼したからであるとも書いてあります。

インターネットの報道はそれだけでしたが、8月の末に発行された雑誌にブルガ氏へのインタビュー記事を見つけました。この雑誌は、昨年、私たちが「パコパンパの貴婦人」と名づけた墓を発見した直後、海岸の都市チクラーヨで暮らす同郷人会が主体となって結成した「パコパンパ遺跡保存を支援する会」の季刊誌です。チクラーヨは、パコパンパから最も近い海岸の大都市で、村人が高等教育のために子弟を送る先であり、彼らの親類が暮らしたりする場所でもあるので、村とは深いつながりがあります。

チクラーヨの同郷人会であるパコパンパ・クラブは、首都リマにある同郷人会とともに、村の経済、あるいは一週間も続く盛大な村祭りなどを支える重要な団体です。

その季刊誌のインタビュー記事を読むと、どうもこのブルガ氏は、パコパンパ出身の人物のようです。子供の頃、チクラーヨに移り、大学まで出たのですが、先述したように、近年、故郷周辺で進む鉱山開発に危惧し、自らが環境保護団体(?)に所属することもあって、パコパンパ周辺でこれまでに300枚近い写真を撮影してきたといいます。

なぜパコパンパにUFOが現れたのかという質問に対しては、ここはもともと重要なものが引き寄せられる場所であって、宇宙人は、われわれを助けにやってきたのである。しかもここは、数千年におよぶ文化が発達した場所で、近年それが明らかにされつつある、と意味不明な発言をしています。デジタル写真の加工は、私ですら簡単にできますから、これがいいかげんな報道である可能性は十分にあります。

注目すべきは、ニュースの内容よりも、こうしたニュースがどのように生まれ、どのように社会に流れていくのかを見ていくことにあります。これにより、私たちが暮らす現代社会の状況なり問題点が浮かび上がってくることがあるからです。昨年来、「パコパンパの貴婦人」の墓の発見が、わたしたちの考えや意図とは離れて、さまざまな脈絡のなかに置き換えられ、新たな解釈を生み出していく過程を何度も見てきました。当事者であっただけに、それが私の周辺に限ってですが政治問題化し、不快さを感じることもありました。こうした発見から派生する新たな事態は、単に生じるばかりか、グローバル化、高度情報化の中で、瞬く間に社会に広がっていくのが常です。「パコパンパの貴婦人」の発見でも、ある程度、こうした現象に対応する準備をしてきたつもりでしたが、墓の発見から1年もしないうちに、UFOで有名になるとは予想していませんでした。「パコパンパの貴婦人」の頭蓋骨には、人工的な変形が施され、正面から見ると逆三角形状に見えるのは、確かにH・G・ウェルズの小説の挿絵に描かれたような火星人に見えなくもなく、私もよく講演で、われわれが想像する宇宙人のような頭だとは言ってきたのですが…。

有名な観光地、マチュ・ピチュでは、神秘体験ツアーの団体の訪問は日常化していますし、最近の日本の有名な週刊誌でも、神秘的力が秘められた世界のパワースポットの一つとして、なんと日本調査団が30年以上にわたって調査してきたペルー北高地のカハマルカ市近郊にあるベンタニーヤ・デ・オトゥスコという壁がん状の墓地がとりあげられていました。なんとマイナーな場所に光が与えられたことやら。その意味では、パコパンパにUFOというのも決しておかしな現象とも言えないのかもしれません。もし、このUFOが、自分たちの祖先が過去に降りた場所を再訪したのであり、「パコパンパの貴婦人」はその証だとか、勝手な解釈が流布し始めたら、私としても多少口を挟むでしょうが、今のことは、現代社会を分析する材料の一つとして冷静に見守っています。

それにしても、パコパンパに観光客がやってきて、マチュ・ピチュで行われているように、岩に皆が張り付き、瞑想し、その横でわたしたちが発掘する、そんなことが現実に起こったら、結構おもしろいかもしれません。

来年は、新しい村長、それになにより何かまた新しい現象が起きるのか、考えるだけでもわくわくします。

パコパンパ遺跡で発掘作業員の娘ジャスミンちゃんと記念撮影

関　雄二（せき・ゆうじ）

1956年東京生まれ。
国立民族学博物館研究戦略センター教授ならびに総合研究大学院大学教授。
専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979年以来、南米ペルー北高地において神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の形成過程を追究するかたわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。
単著として『アンデスの考古学』（同成社）、
『古代アンデス 権力の考古学』（京都大学学術出版会）、
共編書として『文明の創造力』（角川書店）、
『アメリカ大陸古代文明事典』（岩波書店）、『古代アンデス 神殿から始まる文明』（朝日新聞出版）がある。